

○事業所名	放課後等デイサービス あいりす		
○保護者評価実施期間	2026年 2月 12日		2026年 2月 28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	46	(回答者数) 28
○従業者評価実施期間	2026年 2月 12日		2026年 2月 28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	11	(回答者数) 10
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 1日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	支援・療育・環境に常に問題意識を持ち、改善点があれば即日実行できるアクティブな対応力がある。無駄のない充実した支援と療育。終日療育(来所から帰るまでに行う挨拶やルーティンワーク、マナーやルールを順守する規範意識を育む)を心がけて1日を通してトータル的な療育となる様に支援を行っています。	子ども同士の相性やマッチングを考慮し効果のあるコミュニケーションを育むことを実践。1日を通して、生活・遊び・個別プログラム・集団プログラム・映像を利用したビジュアルプログラム・コミュニケーションプログラムといった多様なコンテンツを用意して常に療育的な視点に立ち恒常的に取り組んでいる。	全国的な子どもの状況を統計から把握。どのような手法が子ども達のよりよい支援や療育となるかを今以上に職員一同の勉強会等を通じて高めていく。外部の講師などを招いての療育企画なども充実させたい。映像コンテンツを使った視覚的な学びや理解を推進することでより充実したプログラムを形成したい。
2	社会と繋がるボランティアや奉仕活動を継続的に実施。年齢に相応しい支援体制の充実。6年生活動として中学生になる為の準備的な療育プログラムを実施している。また、中高生が社会的なスキルを学べるように特別なプログラムを準備して外部とも大きく関わるイベントを充実させている。	常に情報収集に努め、1年を通して季節ごとに地域交流イベント(子どもフリーマーケット等)のイベントを開催して地域の方との交流を図っている。食・動物愛護・寄付活動・ボランティア活動等を外部と深く関わりながら協働して活動することで老若男女や世代の壁を越えた交流を実現させ学びの機会を増やしている。	仕事場見学や専門家のお話を伺う傾聴活動を推進したい。外部ボランティアだけでなく、事業所が所有する畑などで農業体験など自主的な活動をさらに積極的に増やし、流通の流れまでトータルな学びにする。実際のスキルの獲得を目指し、より実践に近い形の体験をシミュレーションしながら実践を継続的に行う。
3	諸問題に対して迅速な改革と問題解決の為の対応。事業所内の物理的な問題点や子どもの安全を最優先したレイアウトや使用する備品等にも気を配っている。支援や療育する中で発生した問題は即日対応検討し速やかな改善が行われるシステムがある。保護者からの要望や相談にも迅速な対応を行っている。	無添加のおやつや手作りのおやつ作りにも意識的に取り組んでいる。子どもが使うハサミやテープカッターなどの保管場所や安全性を最優先した備品の購入や交換などを常に実施。テーブルや長机、フロアマットなどケガの帽子に最大限の配慮を行う。毎日問題点をミーティングで明らかにして即日改善している。	いじめ問題や社会で今起きている課題を共有しながら支援に生かしたい。最新の情報を入手するために様々な分野での情報収集を図り、様々な実験的な取り組みを実践してゆく。事業所内で発生する問題に対処するだけでなく、問題が起きない事前の取り組みを会議等で話し合うことを増やし実践する。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者対応。保護者同士の交流会やペアレントトレーニングを充実させる。より積極的な交流と相互の学びの場となる勉強会などが少ない。	積極的な交流や勉強会を望む保護者と消極的な保護者が混在しており実施が出来ていない。共働きの家庭が多く時間的な調整が難しい。	現在あるフリーマーケットなどのイベントを通じて開催後に何らかの交流ができないか検討している。事業所の職員の意識改革と保護者が参加意欲を感じるような企画を立てる。お茶会などの気軽な集まりで悩みを共有したり相互の交流を図ることで連携を強化したい。
2	中高生との混在でニーズなども含めて初期学生との住み分けが難しい側面もある。事業所内のレイアウトや使い勝手。年齢が上がるにつれて、事業所内の支援ルームが時折手狭に感じる場合がある。パテーションや活動場所の工夫をする。	物理的に中学生が大幅に増えている。事業所が開所した当時はあまり感じなかったが、全体に子どもの年齢も上がり体格もあり活動のすみ分けが必要である。パソコンやタブレットの使用など新しいニーズにこたえるべくスペースを確保する工夫が必要。	模様替えや午前午後での家具等の配置を変えて対応してゆく。学習場所・工作など創作活動の場所・自由遊びの場所・静養室等の使い勝手を含め、子供の意見を丁寧に聞き取ることでその意見を支援ルームの使い勝手の良さにつなげたい。
3	事業所と家庭の連携が弱く相互的な療育効果が弱い。緊急対策マニュアル等の周知。火事や地震などの自然災害時のマニュアルを保護者と共有することが充実していない。普段から避難訓練や防災についてのレクチャーをしているが、南海トラフ地震などを想定したリアルな学習を充実する。	保護者との連携において具体的な提案が少なく、問題点の洗い出しなどが実際の効果につながらない。ホームページなどで情報公開や保護者への様々な周知をしているがまだ十分とは言えない。	あいりすだより(季刊のおたより)年4回発行をの回数を6回に増やし告知する機会を増やす。ホームページ等にも保護者向けの告知ページなどのコンテンツを早急につくる。